



グローバルヘルス サマープログラム2011 報告書

Global Health Summer Program 2011 Report

目次

1. 「グローバルヘルス サマープログラム」とは.....	2
2. 「グローバルヘルス サマープログラム」概要.....	3
3. アクション・プランまとめ.....	8
4. 講師とメンター、スピーカーのご紹介.....	9
5. 参加者一覧.....	13
6. GHSP2011を終えて.....	14

「グローバルヘルス サマープログラム」とは

グローバルヘルス サマープログラム2011は、世界を舞台にグローバルに活躍し、より良い社会の実現に貢献することをキャリアにしたいと考える若者を対象とした、グローバル・ヘルス分野の次世代リーダー養成プログラムである。

グローバル・ヘルスという重要な地球規模課題に対し、日本が継続して貢献していくために、官民を巻き込んだどのようなアクションがあり得るのか、グローバル・ヘルスにおける重要課題の一つである、「ポリオ撲滅」をミッションとして具体的な解決策を考えた。

プログラムでは、グローバル・ヘルスや各界のリーダーや社会起業家によるレクチャーを受けた後、各チームに分かれ、フィールドワーク期間に、個人や団体、企業と議論・交渉を行い、社会にインパクトを与え得るアクションプランを策定、報告を行った。実現可能性の高い案は、プログラム終了後も継続して取り組むことを予定している

プログラムを通じて養う力

1. グローバルな視点
世界を活躍の場とするためには、幅広い知識のみならず、世界で起きていることを自分に引き付けて考える視点が重要である。世界的課題に対する認識を深め、日本がどのように世界的課題に貢献できるか、自分に何ができるか、を主体的に考える力を養う。
2. コミュニケーション力
仕事を遂行する上で欠かせない表現力。いかに相手に「伝える」か、日常のコミュニケーションから、PPT資料の作成法までを学び、実践する。
3. 問題解決力
全体像を捉えた上で、注力すべき本質を見出し、切り込む力。限られた期間内にフィールドワークを行い、アクション・プランを策定するために、課題全体を広く捉えた上で、交渉すべき個人や団体、企業を見出し、アクションを起こすというプロセスを通じ、問題解決手法を実践で学ぶ。

プログラムの流れ

多様なバックグラウンドをもつ学生に対し、包括的かつ先端的な学びの場を提供すべく、以下の流れでプログラムを進めた。

DAY 1-3
知識とスキルの習得

DAY 4-7
フィールドワーク

DAY 8-9
アクション・プラン作成

DAY 10
アクション・プラン発表

【開催期間】

2011年7月28日(木)～8月6日(土)

【開催場所】

東京大学本郷キャンパス

【主催】

特定非営利活動法人 日本医療政策機構
東京大学大学院 医学系研究科 国際保健政策学教室

7月28日(木)

オリエンテーション

特定非営利活動法人 日本医療政策機構

参加者の顔合わせを行い、本プログラムの意義、プログラムの流れ、アクション・プラン報告のためのガイドライン等の説明を行った。参加者は課題を確認した上で、本プログラム参加にあたっての各自の問題意識の所在について述べ、各自が本プログラムを通じて何をしたいのかを確認した。

グローバル課題に対するソーシャル・メディアの可能性～世界を動かすツール～ (昼食会)

近藤 正晃ジェームス(ツイッター社日本代表)

本講義では、講師自身がこれまで取り組んできた医療政策・グローバルヘルス課題への取り組みに続き、震災時の事例を参考に、Twitterなどのソーシャル・メディアが世界的課題に対して果たし得る役割について考えた。社会問題の解決には、複数の異なるステークホルダーの協力が重要となるが、ソーシャル・メディアは、人と人とをつなげることによって、社会を変革させる力を生み出すことが可能である。ソーシャル・メディアにより、これまでのトップダウン方式だけでなく、ボトムアップによる、社会的な課題設定と解決も今後は期待できるのではないかと話され、第一講義は締めくくられた。

Polio Eradication and UNICEF's role

平林 国彦(国際連合児童基金(UNICEF)東京事務所代表)

「なぜポリオは根絶されるべきなのか？」という問いから始まった本講義は、なぜこの課題に挑もうとしているのか、根絶によりどのようなアウトカムがあるのか、について参加者がディスカッションするところから始まった。続いて、ポリオの現状・ウィルスのタイプ・感染経路・症状・予防方法・ワクチン接種等について、UNICEFのポリオに対する取り組みと合わせて学んだ。最後に、平林氏は、公衆衛生においては、いかに資金を効率よく使用し、多くの人を救うか、という視点で考えることが多いが、一人一人を幸せにする、という意識も大事にしてほしい、と強調された。

Japan's contribution to global health

金森 サヤ子(外務省 国際協力局 地球規模課題総括課 外務事務官)

本講義では、DAH(Development Assistance for Health)とODA(Official Development Assistance)を様々な角度から考察し、グローバルヘルスの過去20年の潮流及び、日本のグローバルヘルスへの貢献について、学んだ。2000年にミレニアム開発目標(MDGs)が設定され、2015年までに達成すべき8つの目標が明確化されたものの、目標の達成は依然として厳しい状況であり、更なる取り組みが欠かせない。グローバルヘルスへの貢献が外交手段としても重要な役割を担うなか、日本のグローバルヘルス政策の強化及び、国際的に活躍できる人材の育成・輩出の重要性についてディスカッションを行った。

7月29日(金)

国際保健の潮流

黒川 清(特定非営利活動法人 日本医療政策機構 代表理事)

「incunabula」という言葉から始まった本講義は、15世紀のグーテンベルグの印刷革命、及び最近の中東のツイッター革命を取り上げ、情報の広がりがいかに大きな力を持ち得るか、を考えた。情報が瞬時に世界中に広がる今、3.11に発生した東日本大震災への対応をめぐっては、個々の日本人の素晴らしさが称賛された一方、日本の「組織」の弱さや不備が世界中に露呈する結果となった。政治・経済が一つにつながるグローバルな世の中で、我々は、グローバルヘルスをはじめとした、地球上の重要な課題を共に解決していかなければならない。これからの日本には、組織の枠にとらわれず、グローバルに活躍できる個人が必要である。黒川氏は、世界を舞台に活躍することを目指す受講生に向けて、学生のうちに海外に行き、知識・経験を積むこと、実践・行動力の重要性を語り、講義は締めくくられた。



問題解決の基本&コミュニケーション

山崎 蘭加(ハーバード・ビジネス・スクール日本リサーチ・センター シニア・リサーチ・アソシエイト)

アクション・プラン作成に向けての思考プロセスを学ぶ目的で、受講者がグループに分かれて演習問題に取り組んだ。プランの段階に必要なMECE、ロジック(イシュー)ツリーにより、論理的に議論を展開する手法を学び、リサーチ、分析、まとめ・ストーリーライン作成といった一連の問題解決プロセスについて演習を重ねた。その後9日間のプログラム中、参加者は当講義によって得られた問題解決の基本スキルに頻りに立ち返り、ロジックに基づいた視点からの議論を試みた。

プレゼンテーション・インタビュー

山崎 蘭加(同上)

プログラム最終日の報告会に向けたプレゼンテーションスキルの習得を目的とした本講義では、日本のグローバルヘルス政策に関する現状と課題について短時間にまとめ、発表するというグループ演習が行われた。受講者はプレゼンテーションの組立て、スライドの作り方、発表方法等の基本スキルを学んだ。インタビューの方法についても学んだ後、「伝えたい気持ちが大事」というかたちで締めくくられた本講義により、受講者は単なるスキルにとどまらないコミュニケーションのあり方について学んだ。

ポリオ撲滅に向けた取組みを中心に

尾身 茂(自治医科大学教授)

本講義では、尾身氏がWHOにて、西太平洋地域のポリオ根絶に携わった経験を中心に、ポリオ根絶までの困難ややりがい、また、将来グローバルに活躍することを目指す受講生へ向けて、キャリアアドバイスを話された。ポリオ根絶に向け、大規模なサーベイランスの実施、継続的な資金獲得の試み、ワクチン接種をめぐる各国の保健大臣との折衝など、尾身氏の実験の経験を踏まえ、当時の様子を詳しく伺うことができた。最後に、優れたリーダーになるには、社会に対する高い意識をもち、物事を総合的に捉え、正しいことをする決断力が大切であるということを強調された。

7月30日(土)

「変わらない」を、変えていくーソーシャルマーケティング思考のすすめー

石川 善樹(株式会社キャンサーズキャンディレクター)

本講義は、マーケティングの手法を社会問題解決に活用する、ソーシャル・マーケティングについての理解を深めることを目的として行われた。クイズや映像、実例を多用しての石川氏の講義は、講義のプレゼンテーション自体が受講者の心を捉えたようであった。戦略を立てるだけでなく、その戦略をいかに表現するかが大事である、という講義全体を通じてのメッセージに、受講生は、受け手の立場に立ち、共感を生む表現の重要性を認識した様子であった。

グローバルヘルス政策

渋谷 健司(東京大学大学院 医学系研究科国際保健政策学教室 教授)

本講義では、世界が注目するグローバルヘルス課題の現状、プレーヤー及び、日本の当課題への対応について学んだ。グローバル社会に生きる今、グローバルヘルスという地球規模課題に対し、日本がどのように貢献をするかは、政治・経済問題として重要であり、日本のグローバルヘルス政策の強化が求められている。また、今回のテーマであるポリオは最優先事項なのだろうか、と受講生に問われ、ディスカッションの後、データを見ながらグローバルヘルスの現状を定量的に把握し、エビデンスに基づいた議論を展開することの重要性を確認した。

ワクチンを通じたグローバルヘルス課題へのJCVの取組み

新井 俊郎、窪田 順子(世界の子どもにワクチンを日本委員会)

本講義では、感染症の完全予防を目指し、募金活動や社会啓発により、途上国へのワクチン支援を行っている、「世界の子どもにワクチンを」(JCV)の活動展開を通じ、日本の国際保健NGOの現状と課題について学んだ。福岡ソフトバンクホークスの和田毅投手が始めた「僕のルール」や、企業との連携を通じた募金活動が紹介され、「社会に対して何かしたい」と考える一般の人が、気軽に参加できる仕組み作りの重要性について考えた。日本の多くのNGOがおかれた厳しい運営状況など、課題はあるものの、変わりつつある日本の寄付文化をとらえ、今後の更なる活動展開が期待される。



Global Polio Eradication Initiative

岡安 裕正(世界保健機関(WHO)ポリオ撲滅イニシアティブ 医官)

現在ジュネーブのWHOに勤務する岡安氏と、初の試みとしてビデオ会議形式で講義を行った。ポリオ撲滅に向けた、これまでの対策、今後必要な取組みを説明された上で、日本に期待される役割について考察した。ディスカッションでは、日本はこれまで、ポリオ対策に多額の財政支援や技術開発支援を行ってきたが、今後は、より積極的にイニシアティブをとり、他国と協力して、撲滅に向けた最後の一寸を推し進めることが必要ではないか、との意見が出された。

7月31日(日)

Access to Medicines

スリングスピー B.T.(エーザイ株式会社 グローバルパートナーソリューションズ ディレクター)

英語で行われた本講義では、エーザイ株式会社の医薬品アクセスの改善に向けた取組みを通じ、社会的課題に対して企業が市場をベースとしてどのように貢献できるか、について考察した。世界中には、効果的な治療法が存在するにもかかわらず、貧困や医療システムの不備などから必要な医薬品が入手できない多くの人々がいる。医薬品アクセスを改善するには単に医薬品を供給するだけでなく、それぞれの地域の医療ニーズの見直し、イノベーションの創出及び、継続的な医療提供が必要である。中長期的観点に基づいた、企業と途上国パートナー機関・団体の双方に価値のある、新しいビジネスモデルの可能性についてディスカッションを行った。



8月1日(月)～8月3日(水)

フィールドワーク・中間報告会

各班に分かれ、ガイドラインに基づいてポリオ撲滅に向けた具体的課題の設定、打ち手の立案を行い、期間内で可能な限りプランを実行することを試みた。フィールドワーク期間中は、実社会で活躍するメンターが、適宜アドバイスを行う機会を設けた。中間報告会では、本番同様に班毎に報告を行い、メンターの山崎氏より、論理性、実現可能性、プレゼンテーション法等について助言を得た。

キャリアフォーラム1 ～「世界を変える」を仕事にする～

「グローバルヘルス サマープログラム」受講生が、社会貢献を目指し、グローバルに活躍している2名の先輩の体験談を聴き、国際的なキャリアパスを描く際の心構え、参考情報及びネットワークを得る機会を創出することを目的とし、キャリアフォーラム1を実施した。

<パネリスト>

小暮 真久 (TABLE FOR TWO International 代表)

世界の約70億人の人口のうち、10億人が飢えに喘ぐ一方で、10億人が肥満など食に起因する生活習慣病に苦しんでいる。この食の不均衡の同時解決を目指して活動しているのが、Table For Two (TFT)である。小暮氏がTFTを立上げるまでのキャリア、TFT立上げ時の様子、そして日本のみならず海外支部をもつまでに至ったTFTの事業展開について伺い、いかに多くの企業・団体と協力しながら、活動を広げていったか、具体的なエピソードを聞き、参加者はアクション・プラン作成に向けて多くの示唆を得た様子であった。

坪内 南 (教育支援グローバル基金 理事・事務局長)

東日本大震災を受け、「一般財団法人 教育支援グローバル基金」を設立。教育支援事業BEYOND Tomorrowを開始し、未来を担う若者が今回の災害によって教育機会を失われることのないよう、奨学金提供ならびに就学支援・リーダーシップ教育などの各種プログラムを提供し、次世代を担う人材輩出の支援を行っている。他者への共感力の育成が行動につながり、世界を変える、との思いを胸に、多くの人を巻き込んで教育支援事業を展開されている坪内氏のお話を通じ、思いを行動に移す、行動力の重要性を感じるセッションとなった。

8月5日(金)

キャリアフォーラム2 ～途上国で貧困世帯を守る～

キャリアフォーラム1に続き、開発分野で国際的に活躍するスペシャリストの体験談を聞き、仕事内容、キャリアについてアドバイスを得る場を設けた。

<パネリスト>

森 秀樹 (世界銀行 緊急社会対策プログラム担当マネージャー)

民間企業から世界銀行へ転進された森氏のご経験、世界銀行で現在携わっているソーシャル・プロテクション分野の業務について語られ、最後に受講生との質疑応答を行った。統計や画像を用いた受講生とのディスカッションを通じ、エビデンスに基づいた議論の重要性について語った。最後に、将来、グローバルに活躍することを目指す受講生に向けて、学生のうちに身につけるべきスキルなどの具体的アドバイスを行い、国際機関でのキャリア構築について考える、よい機会となった。



8月6日(土)

<最終報告会>

10日間にわたるプログラムの総括の場として、各班がアクションをまとめ、グローバルヘルスの専門家や、社会で活躍する起業家から講評を得た。

時間: 10:00-12:00

会場: 東京大学 福武ラーニングシアターB2F (福武ホール)

審査員(敬称略):

黒川 清 (日本医療政策機構代表理事)

齋藤 ウィリアム 浩幸 (株式会社インテカー代表取締役社長、日本医療政策機構理事)

坂之上 洋子 (ブランド経営コンサルタント)

渋澤 健 (シブサワ・アンド・カンパニー株式会社代表取締役、日本医療政策機構副代表理事)

吉田 裕明 (日本医療政策機構理事)

式次第

10:00 開会
10:15 アクション・プラン発表(4班)
11:15 審査員のコメント
11:50 総括
12:00 閉会



アクション・プランまとめ

アクション・プラン報告会では、10日間にわたる各班の取組みを発表した。審査の結果、C班が優秀班に選出された。各班のアイデアの実現も視野に入れながら、今後、日本医療政策機構では、ポリオ撲滅に向けた取組みを強化していく。

A班 Polio Raises Leaders



発表要旨

現地ヤングリーダーと日本学生(企業内定者)が、提携企業支援のもと知識やスキルを習得し、現地NGOと協力してポリオ撲滅のための問題解決フィールドワークに取り組む。これにより、非常在国(一度ポリオを撲滅した国)でポリオ対策を継続するための人材を養成する。

講評

ポリオの撲滅に向けて、非常在国への再定着を防ぐことこそが重要と考えた点がユニークであった。その解決に向けて、「リーダーの育成」が必要であると考え、発展途上国と日本のヤングリーダー、アフリカNGO、提携企業、大学・研究機関それぞれのインセンティブが検討されていた。一般的に企業の巻き込みが一番苦勞をるところなので、その工夫があるとさらに良いだろう。

B班 Final Click for Polio



発表要旨

NPO「世界の子どもにワクチンを(JCV)」の既存の仕組み(facebookの「いいね!」がクリックされるごとに20円の寄附を協賛企業が行う)を世界に拡大しアクセス数を増加させるため、日本在住の外国人コミュニティや海外へ向かう日本人へ普及の働きかけ、イベントの企画などを行う。

講評

facebookというソーシャルメディアに着眼し、既存の仕組みを上手く活用、拡大しよう、という発想がユニークであった。①資金集めと②社会の巻き込みに焦点をあて、既存の活動をグローバルに展開するアイデア、また、一般のポリオへの理解度向上のためのアフターイベント開催などが、わかりやすく述べられた。発表案ではスポンサーは一社であったが、複数のスポンサーを探し、より活動を拡大することも可能ではないだろうか。

C班 Happy Poli Poli Project



発表要旨

ワクチン接種をするインセンティブを住民に与えると同時に、ワクチン接種の効果を上げるために衛生環境・栄養状態の改善を図り、長期的な子どものQOLの向上に取り組むことを目的とした。具体的には、以下2案を提案。

①Nin'Jaキャンペーン…ナイジェリアのワクチン接種者に対しておむつや高栄養価菓子を無償提供し、ワクチン接種のインセンティブを高め、子どもの栄養状態を改善する。費用は、企業の商品の売上げの一部を寄付にあてる。

②マイクロインシュアランス…マイクロインシュアランス(低所得者をターゲットにした保険)への加入機会の提供をインセンティブに、ワクチン接種を呼びかけ、長期的な子どものQOLの向上を目指す。

講評

子どものQOLの向上に焦点をあてた、短期・長期的双方の観点によるクリエイティブなアイデアであった。様々な個人や団体との面談、また、facebookを使用した意見聴取など、多角的なアプローチにより、アクション・プランの実現可能性の高さが熱意と説得力をもって語られた。発表の際の、コミュニケーション力の高さも素晴らしかった。

D班 Bands Project



発表要旨

常在国がポリオの輸出国となっている現状を食い止めるため、虫除けバンドを用いたワクチン接種キャンペーンの実施や、日本のポリオ回復者会からナイジェリアのポリオ回復者会へ、日本企業を通じた資金援助の仕組みを創出し、ワクチン接種の重要性を住民が深く理解し、ワクチン接種のインセンティブをつくることを目指す。

講評

実際にアフリカでの体験から生まれた、虫除けバンドを使ったアドボカシーのアイデアが説得力を持って語られた。虫除けバンドにより、ポリオのみならず、マラリア対策も視野にいれた、ポトムアップから導かれたアドボカシーである点、また、日本とナイジェリアのポリオ回復者へ目を向けたプランである点が新鮮であった。

講師とメンター、スピーカーのご紹介

講師

※講演順、敬称略

7月28日(木)



近藤 正晃ジェームス
Twitter 日本代表

慶応義塾大学経済学部卒、ハーバード経営大学院修了。マッキンゼー・グローバル・インスティテュートの中心メンバーの一人として、日本・台湾・米国・英国・フランス・ドイツ・ロシアにおける国家経済政策を立案。2003年に東京大学医療政策人材養成講座を、2004年に日本医療政策機構をそれぞれ設立、運営に携わる。2007年、TABLE FOR TWO Internationalを設立。2009年より、国家戦略室長付参事官、内閣官房副長官秘書官、内閣国際広報戦略官に従事。2011年より現職。ダボス会議のYoung Global Leaderに選出。



平林 国彦
国際連合児童基金 (UNICEF) 東京事務所代表

医学博士。約10年間、国立国際医療センター国際医療局に勤務し、ポリビア、コロンビア、インド、インドネシア、ホンジュラス、ウズベキスタン、南アフリカ、ベトナム等の病院での技術指導、保健省での政策立案支援などを担当。JICA専門家・WHO短期コンサルタントなどを経て、2003年からユニセフ勤務。アフガニスタン、レバノン、東京事務所での勤務を経て、2008年からインド事務所副代表を務める。2010年4月からユニセフ東京事務所代表。



金森 サヤ子
外務省 国際協力局 地球規模課題総括課 外務事務官

筑波大学第二学群生物学類卒業後、ロンドン大学公衆衛生学・熱帯医学大学院にて医学寄生虫学修士課程を専攻。ビジネスコンサルタントを経て東京大学大学院医学系研究科国際地域保健学博士課程修了。現在、外務省国際協力局地球規模課題総括課にて保健援助政策立案及び戦略策定に従事、東京大学大学院医学系研究科国際保健政策学非常勤講師など。

7月29日(金)



黒川 清
特定非営利活動法人 日本医療政策機構 代表理事

1962年東京大学医学部卒業。69年に渡米し、79年UCLA内科教授。83年に帰国後、東京大学内科教授、東海大学医学部長、日本学術会議会長(2003-07年)、内閣特別顧問(2006-08年)、WHOコミッショナー(2005-09年)などを歴任。現在、日本医療政策機構代表理事、IMPACT Foundation Japan Chair and Founder、政策研究大学院大学教授。『大学病院革命』(日経BP社)、『イノベーション思考法』(PHP新書)、『e-Health改革 ITで変わる日本の健康と医療の未来』(日経BP社)ほか著書多数。
ブログ<<http://www.kiyoshikurokawa.com/>>

Photo: Tetsuo SAKUMA



山崎 蘭加
ハーバード・ビジネス・スクール 日本リサーチ・センター シニア・リサーチ・アソシエイト

マッキンゼー・アンド・カンパニー、東京大学先端科学技術研究センターを経て、2006年よりハーバード・ビジネス・スクール(HBS)日本リサーチ・センター勤務。主にHBSで使用される日本の企業・経済に関するケース作成に従事。また2010年よりフェローとして東京大学Global Health Leadership Programの運営に関与。東京大学経済学部、ジョージタウン大学国際関係大学院卒業。

※ 山崎さんは、メンターもご担当。



尾身 茂
自治医科大学教授

1978年自治医科大学卒業(1期生)。伊豆七島を中心とする地域医療に従事。1990年から世界保健機関(WHO)西太平洋地域事務局に勤務。感染症部長としてアジアに於ける小児麻痺(ポリオ)根絶達成。1999年2月世界保健機関(WHO)西太平洋地域事務局の第5代地域事務局長に就任。SARS対策では、陣頭指揮を執る。2009年日本政府新型インフルエンザ対策本部専門家諮問委員会委員長。医療再生に向けての政策提言も行っている。現在、自治医科大学教授、WHO執行理事。

7月30日(土)



石川 善樹
株式会社キャンサースキャン ディレクター

1981年広島県生まれ。瀬戸内海の離島で、へき地医療を行う父の影響を受け、社会の健康づくりを志す。2003年東京大学医学部健康科学・看護学科卒業、同大学院医学系研究科修了。2008年ハーバード大学公衆衛生大学院(Health Policy and Management専攻)修了後、現在はキャンサースキャンのディレクター。

専門: Social Marketing/Social Innovation/Health Communication/Public Health



渋谷 健司
東京大学大学院 医学系研究科国際保健政策学教室 教授

東京大学医学部医学科卒業後、東京大学・帝京大学での勤務を経て米国ハーバード大学公衆衛生大学院にて博士号取得。WHOのGlobal Programme on Evidence for Health PolicyとHealth Statistics and Evidence, Measurement and Health Information Systems, Evidence and Information for Policyにて勤務した後2008年から東京大学大学院医学系研究科国際保健政策学教室の教授に就任。専門分野は保健政策、経済学、人口学、統計学、疫学。



窪田 順子
世界の子どもにワクチンを 日本委員会

2001年日本女子大学卒業。2001年より2年間販売職に就職、2003年よりNPO法人地球緑化センターが幹旋する「緑のふるさと協力隊」に参加。1年間山口県で地域振興ボランティアに関わり、その後山口県西部森林組合に就職。2007年より財団法人国際農業者交流協会が主催するアメリカ農業研修を経て、2011年1月1日より、認定NPO法人世界の子どもにワクチンを 日本委員会(JCV)の広報部兼学校事業部に所属。



岡安 裕正
世界保健機関 (WHO) ポリオ撲滅イニシアティブ 医官

米国海軍病院、マッキンゼー・アンド・カンパニーを経て、2008年より現職
慶応大学医学部卒業、スタンフォード経営大学院修士課程修了(MBA)

7月31日(日)



スリングスピー B.T.
エーザイ株式会社 グローバルパートナーソリューションズ、ディレクター

グローバルパートナーソリューションズは、医薬品へのアクセスを長期的かつ持続可能に改善するための新しいパートナーシップ型ビジネスモデルの実施、発展途上国における感染症の治療薬を対象とした新しい共同開発モデルの開発、およびエーザイとリンパ管フィラリア症制圧に携わる世界保健機関(WHO)とのパートナーシップの運営を行っている。

エーザイ入社前は、日米の営利・非営利機関の設立に携わり、「ランセット」、「アメリカン・ジャーナル・オブ・パブリックヘルス」、「ジャーナル・オブ・ジェネラル・インターナル・メディスン」などの学術専門誌に50編以上の論文を掲載するほか、医療研究に取り組む。ブラウン大学卒業後、京都大学および東京大学にて修士・博士号を、またジョージワシントン大学にて医学博士号を取得。

メンター



田中 謙司
東京大学大学院 工学系研究科 助教

2000年に東京大学大学院工学系研究科を卒業後、マッキンゼー社にて、電機、金融、医薬品業界等で経営コンサルティング業務に従事。03年より日本産業パートナーズに参画、未公開会社への投資および経営支援を担当。同社ヴァイスプレジデントを経て、06年より東京大学助手、07年より現職。専門は技術経営。08年工学博士取得。09年より二次電池社会システム研究会理事を兼務し、再生可能エネルギー導入を促進。

ツイッター: <http://twitter.com/#!/giro1215>

ブログ: <http://giro1215.cocolog-nifty.com/giro/>



福吉 潤
株式会社キャンサースキャン 代表取締役

ハーバード大学経営学修士(MBA)。慶應義塾大学総合政策学部卒業後、1999年よりプロクター・アンド・ギャンブル社(P&G)にてブランドマネジャーとしてブランドマネジメント・マーケティング職に従事。2006年、マーケティングを社会問題解決に役立てるというソーシャルマーケティングを学ぶためハーバード大学ビジネススクールに留学。帰国後、がん検診の受診率向上にマーケティングを活かすソーシャルマーケティング会社を、ハーバード大学スクールオブパブリックヘルス(公衆衛生大学院)の同級生と起業。国立がん研究センターと協働し全国の自治体において地域モデル事業を実施中。東京都がん検診受診率向上施策検討会委員/厚生労働省がん検診受診促進企業連携推進事業アドバイザーボードメンバー。

ウェブサイト: <http://www.cancerscan.jp>



渡邊 さやか
soket Director、Kopernik Associate

国際基督教大学卒業、東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障プログラム」修了。2007年より日本IBM(入社当時はIBCS)にて、業務改善、環境系新規ビジネス策定など経営コンサルティング業務に従事。09年から社内Green & Beyond Communityリード、10年にはProbono事業立ち上げに参画。その傍ら、10年にNPO法人soket設立、米国法人Kopernik日本支部立ち上げに関わる。11年6月に日本IBMを退職し、東北の復興フェーズの仕組みづくり、産業復興に向けた東北でのビジネス構築に携わると共に、海外ビジネス展開支援をする。

Twitter: sayaka65

soket: <http://www.soket.me/>

Kopernik: <http://kopernik.info/>

キャリアフォーラム1 スピーカー



小暮 真久
TABLE FOR TWO International 代表

1972年生まれ。早稲田大学工学部卒業後、オーストラリアのスインバン工科大で人工心臓の研究を行なう。1999年、同大学修士号取得後、マッキンゼー・アンド・カンパニー東京支社入社。同社米国ニュージャージー支社勤務を経て、2005年、松竹株式会社入社、事業開発を担当。その後、「TABLE FOR TWO」プロジェクトに参画。2007年NPO法人・TABLE FOR TWO Internationalを創設し、理事兼事務局長に就任。社会起業家として日本、アフリカ、米国を拠点に活動中。



坪内 南
一般財団法人 教育支援グローバル基金 理事・事務局長

東京都出身。中学校3年より日本を離れカナダへ単身留学。高校最後の2年間は、経団連から全額奨学金を受け、カナダの全寮制インターナショナルスクールに通う。慶応義塾大学総合政策学部卒業。College Women's Association Japan (CWAJ)及び日本/世界銀行共同大学院奨学金プログラムの奨学生として、マサチューセッツ工科大学都市計画修士課程修了。マッキンゼー・アンド・カンパニー、難民を助ける会カプール事務所駐在、世界経済フォーラム(ダボス会議事務局)、日本医療政策機構、バーレーン経済開発委員会などを経て、2011年6月より現職。より広い社会、新しい世界を経験し、志を持つ仲間と切磋琢磨することこそが広い視野を持つリーダーの育成に不可欠と考え、そのような機会を若い世代が持つことが東北の復興につながると信じて教育支援グローバル基金の設立に参画。

2004年 社会貢献支援財団21世紀若者賞受賞。

2006年～2008年 世界経済フォーラム・グローバルリーダーシップフェロー

キャリアフォーラム2 スピーカー



森 秀樹
世界銀行緊急社会対策プログラム担当マネージャー

東京大学農学部卒、アメリカン大学国際開発学修士、デューク大学MBA。国連ラテンアメリカ・カリブ経済委員会を経て、1993年、ヤングプロフェッショナルとして世界銀行入行。ラテンアメリカ/欧州・中央アジア地域局で社会保障・人間開発分野を担当。世界銀行の社会的保護プログラム、条件付現金給付(CCT)プログラムに長年携わる。2007年、人事局ヤングプロフェッショナル・プログラム担当マネージャー。2009年10月より現職。

参加者一覧

(五十音順、敬称略)

相田 華絵	London School of Hygiene & Tropical Medicine, MSc-Public Health in Developing Countries 進学予定
阿部 道和	一橋大学 国際公共政策大学院経済政策プログラム・医療経済学ゼミ 1年
有田 祐起	大阪大学 医学部医学科 4年
今西 佑希	東京大学 工学系研究科システム創成学専攻宮田研究室 修士2年
加治屋 陽一	北京大学 光華管理学院・金融専攻 修士1年
神田 美希子	東京大学大学院 医学系研究科国際保健学専攻国際保健政策学教室 修士1年
嶋田 庸一	東京大学大学院 公共政策学教育学部 奥村裕一研究室 修士2年
袖野 美穂	金沢大学 医学部医学科 6年
橋 昌利	千葉大学 医学部医学科 3年
張 驪驛	東京大学 薬学部・天然物化学教室 4年
土屋 弘	パリ第一大学 IEDES 大学院1年候補生
中川 暁子	Brandeis University, International and Global Studies, Environmental Studies 3年(9月より)
中川 弘子	名古屋大学大学院 医学系研究科・予防医学 博士1年
中村 有紀子	東京女子医科大学看護専門学校 看護 1年
平野 慧	慶應義塾大学 法学部政治学科麻生良文研究会(公共経済学) 4年
堀内 沙央里	神戸大学 保健学研究科国際保健学領域感染症対策分野 1年
元橋 一輝	東京大学 法学部公法コース城山ゼミ 4年
安田 翔	東京大学 教養学部文科Ⅱ類 2年
山崎 博子	聖路加看護大学 看護学科 4年
吉村 やよい	大阪市立大学 医学部看護学科 3年



相田 華絵

London School of Hygiene & Tropical Medicine, MSc-Public Health in Developing Countries 進学予定

10日間という短い期間ではあったが、研修前後で自身のGlobal Healthに対する考えに新たな視点が加わったことを感じている。研修で得た学びと感覚をできる限り新鮮に保ち、今後もGlobal Healthに関わっていきたい。

研修を通して学んだことは数え切れないが、最も印象に残っていることは、「ポリオ撲滅」を考える過程で、ポリオ体験者の存在がすっかり頭から抜け落ちていた自分自身に気付いたことである。ポリオが地球上からなくなれば全てがハッピーエンドではなく、幼少期のポリオウィルスへの感染がその後の人生に大きく影響し、これからも後遺症を抱える方々の生活は続いていく。「ポリオの会」代表の小山万里子さんとお会いし、直接お話を伺うことにより、リアリティを感じた。今回のテーマということで、たまたま考える機会ももらった「ポリオ撲滅」ではあったが、「新たなポリオの会会員が生まれたいことを願っている」という小山さんの言葉を心に刻み、今後も何らかの形でポリオ撲滅活動に関わっていきたい。

GHSP2011に参加したメンバー、講師、メンター、そして最高の学びの環境を整えてくださった運営スタッフの方々、ありがとうございました。

阿部 道和

一橋大学 国際公共政策大学院経済政策プログラム・医療経済学ゼミ1年

まず最初に、すばらしい講師のみなさまと熱い議論を交わした学生、そしてこの貴重な機会をご用意いただいたことに感謝したいと思います。国際保健とは何かということから始まり、Global Healthの潮流や日本の状況などについて、様々な組織や立場の講師によるレクチャーを受け、国際保健への新たな視点を得ることができました。また、知識だけでなく、その背後にある熱意を生で感じることもできたことも貴重な体験です。グループディスカッションでは、それぞれ専門の異なる学生との議論を重ね、社会の課題に対してゼロから解決策を積み立てました。普段日常で生活している中であまり触れることのないテーマについてとことん考え抜き、アクションプランを模索したこの経験は、私にとって大きな財産になると思います。

有田 祐起

大阪大学 医学部医学科 4年

私は2011年7月28日から8月6日までの10日間、GHSP2011に参加し、「ポリオ撲滅」に向けてのアクションプラン作成を目指し、勉強する機会を戴きました。初めに、このような貴重な機会を下された日本医療政策機構、東京大学大学院医学系研究科国際保健政策学教室、各分野の第一線で活躍される講師の先生方、お仕事の合間をぬってアドバイスをくださったメンターの先生方に感謝申し上げます。

プログラム全体を通じて、多くの新鮮な刺激を受けました。世界は広く、様々な領域における専門分野が存在し、それぞれの分野におけるプロフェッショナルが、強烈な個性を発揮し、組織の枠にとらわれず個人の名前と力量で勝負していることに憧れを感じました。多くのことを学ばせて頂きましたが、具体的に3つの項目に絞って述べさせていただきます。

1つ目は、国際舞台、全世界共通の普遍的な仕事場において、実力を認められ、発言力を持つにはどのように自分自身を鍛える必要があるかについてです。客観的な指標、具体的には、世界的に一流と認められる大学での学位や、一流と認められるジャーナルへの論文投稿が必要だと思いました。

2つ目は、相手を説得する技術を磨く必要性です。どれだけ内容に独自性があり、自分自身やその分野に造詣が深い方が賞賛する内容であるとしても、意思決定権を持つ方(特に、専門が別分野であるなら、なおさらである)が納得し、重要性が認められなければ意味がないという厳しさを感じました。具体的に3つの技術について学ばせて戴きました。1つ目は、MECEやマインドマップです。相手に説明する前段階として、自分自身の思考をクリアにしておく重要性を感じました。2つ目は、ソーシャルマーケティングの手法です。論理性や客観性はある程度、妥協するとしても、説得する相手を分析した上で、その相手の主観、琴線に触れる“魅せ方”を工夫することに主眼を置いた点が斬新でした。3つ目は、説得の際に数字を用いることです。統計的な解析方法について具体的にもっと学びたかったです。

3つ目は、各界の第一線で活躍されている方が、進路の岐路に立った時、何を考え、どういう展望のもとに現在の道を選択されてきたのかについてでした。人と人とのつながりを大切にされてきた中で、元同僚をはじめとした友人の助言や協力がかかせないことを感じました。私自身も、今回GHSP2011で出会った同世代の仲間とのつながりをこれからも大切にしていきたいと思っています。

最後になりましたが、このような貴重な機会を下さしまして本当にありがとうございました。

今西 佑希

東京大学 工学系研究科システム創成学専攻宮田研究室 修士2年

工学部の自分がグローバルヘルスプログラムに興味を持った理由は、自分に全く関係のなかった世界を見てみたいと思ったからです。実際にプログラムを受講してみると自分が想像していた以上に勉強となることが多く、今でも驚いています。まず、国際機関やコンサルタント、NGOなどの様々な専門家の方からの講義は大変刺激的でした。専門家の方は保健医療に関することはもちろん、自分自身の生き方についても多く語ってくださり大変勉強になりました。次に多様な参加者。専門がバラバラな参加者と話すだけでも、自分の視野が広がったと感じています。最後にグループワーク。バックグラウンドが全く異なる5人が最終発表という一つの目標に向かって、ワークショップに取り組むのはとてもいい経験でした。授業等でグループワークを行った経験はありますが、全くバックグラウンドが異なったメンバーで五日間も作業を行うことは初めての経験であり、大変貴重な機会だったと思います。本プログラムでの経験は、今後の自分の人生において大きな影響を与えるものだったと思います。このような素晴らしいプログラムの機会を作ってくださった皆様、本当にありがとうございました。

加治屋 陽一

北京大学 光華管理学院・金融専攻 修士1年

国際保健という世界的に重要な課題の多い分野で多くのことを学び考え、志の高いみなさんと議論をするこのような貴重な機会を得られたことを非常に嬉しく思っております。

プログラムを通して、自分自身の存在意義や幸せといったとても大切な問題について考えさせられ、自分だけでなく他に多くのものを背負って生きようとするみなさんの姿勢に共感しました。また、数日間に及ぶ議論を通じて、自分自身の甘さや能力の低さを真っ直ぐ見ることができたのも貴重な経験でした。

今回の経験は私自身が将来国際保健分野に関わっていくきっかけになると思います。専門性を磨き、今回出会った方々と将来、実際の活動ができたらとても素晴らしいことだと思います。

各界の専門家との交流・セミナーに刺激され将来について語り合う中でそれぞれの持つ夢や志が垣間見え、グループワークの白熱した議論ではお互いのよさが光り、とても濃い時間が過ごせたように思います。そんなみなさんとまたどこかで再会できるのを楽しみにしています。

神田 美希子

東京大学大学院 医学系研究科国際保健学専攻国際保健政策学教室 修士1年

この10日間のプログラムではたくさんのことを学んだ。中でも3つを挙げたいと思う。

まず、ポリオ撲滅という国際保健の文脈にのせたミッションに対する問題解決思考過程である。途中、踏み外すことや逆戻りすることが何回もあったが、そうして徐々に全体の枠組みや自分自身の考えが浮き彫りになってくることを実感した。次に、人にものを伝えるということがいかに難しくまた面白いかということである。人を動かすには事実だけではつまらなく熱い想いだけでは根拠に欠け、何をどう伝えるか、相手の視点に立つという基本的なことが重要であることを再認識した。最後に、互いの専門性を認め生かしあうことの大切さ、そして仲間が大きな力となり同じ目標に向かって進む糧になることである。多くの人を巻き込むことで解決の糸口や新たな展開が広がるのを目の当たりにした。人と繋がること、仲間を作ることをこれからも心がけたいと思う。

この先、国際保健の場での実践を目指す中で、今回のプログラムの貴重な経験を生かしていきたいと思う。このような機会を与えていただいたこと、そしてこのプログラムでの多くの人との出会いに心より感謝している。

嶋田 庸一

東京大学大学院 公共政策学教育学部 奥村裕一研究室 修士2年

今回のグローバル・ヘルスマーブプログラムに参加して学んだこと、得られたものは非常に多くありますが、この場でなければ得られなかったと思うことを三つ述べたいと思います。一つはグローバルに活躍する一流の方々との交流です。今現在世界の中にある問題について考え抜き、取り組みを行っているの方々から直でお話を伺い、自分自身の感じたことをぶつける経験は普段の大学院の生活では得難い貴重な経験で、自分自身の将来の計画をより具体的に示唆を得られたと思っています。二つ目は志を同じくする人達との真剣な議論、ぶつかり合いです。自分とは全く違うバックグラウンドを持つ人達がそれぞれの経験や持てる知識を総動員して(時にはメンターの方や外部の力も借りながら)アウトプットを作っていく過程は自分自身にとって非常に楽しく、充実した時間を過ごすことができました。三つ目は今回扱ったポリオの様なグローバル・ヘルスの問題について深く考えるきっかけを得られたことです。自分自身が将来取り組むべきオプションとしてこの様な問題もある、と知ることができ、自分の視野を大きく広げることができたと考えています。

このような貴重な経験を得させて頂いて、お返しに自分は何かができるだろうか、と考えていたのですが、少しでも世の中の役に立つことができるよう自分自身を高め、考え抜き、実際に行動することに尽きる、と思い至りました。近い将来必ずグローバルに存在する問題に自分自身が取り組み、世の中の人々が少しでも多く、自分が幸せだと思えるようにすべく全力を尽くしていきたいと思っています。

袖野 美穂

金沢大学 医学部医学科 6年

“新しい一歩を踏み出す勇気”

セミナー初日の衝撃は大きなものでした。多様な経験・専門を背景としたメンバーが、鋭い質問・ディスカッションをしていました。自分の知識の薄さ・論理構成力の低さを痛感し、クラスにどう貢献すれば良いかと思い巡らしました。そんなスタートでしたが、10日間を終え、私は勇気、将来の方向性、そして仲間を得ました。

まずは、企業・議員の訪問、働きかけることを通じて得た行動する勇気、普段は会うことが出来ない人へ質問する勇気、時に不十分だと理解した上で進む勇気を得ました。次に、先生方から一筋縄ではいかないキャリアの経緯をお聞きし、各種ステークホルダーの中での、将来の自分の立ち位置を考える機会を得ました。グローバルヘルスは広範囲に渡る知識と、深い専門性の双方が必要な分野であり、完全一致のロールモデルを見つけることは出来ないことを再確認すると共に、自分の人生に一歩飛び出す勇気と、同じ方向性の仲間を与えて下さるセミナーでした。このような機会を与えて下さった日本医療政策機構の皆様、共に濃厚な10日間を過ごした受講生の皆に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

橘 昌利

千葉大学 医学部医学科 3年

GHSPはかなり本格的なプログラムで、多くのことを学びました。はじめ国際保健に対する私の認識はとても浅い、一面的なものであったと思います。しかし、最初のレクチャーを聞くなかで何度も自分の思い込みを否定されていきました。僕ら日本の学生には、「国際援助=良いこと」という暗黙の認識があります。頭ではわかっている、その思い込みから離れるのはとても難しかったです。上からの善意の押し付けだけでは決して解決できない問題があると実感しました。では、どうすれば良いのか？と悩んでいたところ、講師の先生の中には官僚出身の方やマーケティングのプロの方がいらつしや、どうすれば住民が自発的にワクチンを接種したくなるか、様々な国やビジネスの事例を織り交ぜてヒントをくださりました。ポリオ撲滅というテーマに端を発し、各国の状況やビジネスの事例にまでリサーチ範囲が広がっていったのは面白かったです。またこのような第一線で活躍されている方々に直に話を聞いたのはほんとに幸運であったと思います。このようなプログラムを企画・運営していただいた日本医療政策機構の皆様、メンターの皆様、講師の皆様にご心よりお礼を申し上げます。

張 驪暉

東京大学 薬学部・天然物化学教室 4年

“Think Globally, Act Locally”

ポリオ撲滅という課題に正面から向き合い、私たちに何が出来るかを仲間と共に考え抜いた10日間は、自分はどう生きるかを考える10日間でもあった。ポリオ撲滅のためには全世界がワクチン接種を徹底し、継続することが必要であるが、一団体の力など微々たるもので果たしてその小さな活動にどれだけ影響力があるのか。せつかく課題に正面から向き合う機会を与えられたのだから影響力の大きな、世界が変わる活動をしたい。そのような想いで課題の解決策を考えていたが、実現可能性も考慮し出すと議論は先の見えない迷路のようであった。今回、多くの人と話をする機会を頂き、その中でその方向性が見えてきたように感じている。自分は何ができるか、結局、目の前のことに対して少しずつ取り組むしかなく、志を同じくする仲間を集め、時代の潮流を変えるきっかけを作れたとしても、世界を変えるまでは辿り着かないかもしれない。しかし、大事なことは、大きな理想を掲げ、その理想に確実に繋がる取り組みをしていることだ。さて、自分の理想は何なのか、目の前のこととして何に取り組むのか、まだ考える余地は残っているが、百聞は一見に如かず、行動を起こそう、そう勇気づけられたプログラムであった。

土屋 弘

パリ第一大学 IEDES 大学院1年候補生

プログラム参加用に自己紹介文を書いたと思いきや、気づいたらもう感想文を書いています。

このプログラムの10日間は、まさに「光陰矢の如し」であり、1日1日が大変充実していました。参加している学生のモチベーションも高く、スタッフの皆様も講師陣も素晴らしい方々であり、至れり尽くせりでした。

私はこの素晴らしい環境の中で沢山の事を学ばせて頂きました。理論的な、実践的な知識に留まらず、人としてどう生きていくか、リーダーとしてどうあるべきか、自分が何をしたいかなど、様々な事を考えるきっかけとなりました。多様なバックグラウンドを持つ学生と共に一つの課題に向かって邁進する中で、自分の視野の狭さや知識の浅さに気づかされました。特に講師陣からの御話は「目から鱗」の連続であり、いかに自分が小さな世界で生きているか気づかされました。講師の方々のようにもっともっと広く深い視野を持ち、柔軟な思考であり続けたいです。かけがえのない仲間と、かけがえのない出会いと、かけがえのないこの機会を下さった事に心より感謝しています。これをバネに自分の目標に向かって猪突猛進で生き抜きます。

最後になりましたが、改めて、この場を御借りして皆様方に御礼を述べさせていただきますと思います。黒川代表、渋谷教授、山崎さん、杉山さん、飯村さん、藤本さん、講師の皆様、メンターの皆様、共に切磋琢磨したメンバーの方々、その他関係者の皆様に深く御礼申し上げます。素敵な10日間を有り難うございました。

中川 暁子

Brandeis University, International and Global Studies, Environmental Studies 3年(9月より)

ポリオにどっぷりと浸った10日間。我が人生、後にも先にもこんなにも「ポリオ」という言葉を耳にし発する10日間は無いのではないかと思います。思いながら過ごした10日間。今だにポリオという言葉を知ると反応してしまう自分がいます。それ程濃かった10日間にポリオを通して得た出会いや経験は、私にとってかけがえのないものとなりました。GHSP2011を企画・運営して下さった日本医療政策機構の方々をはじめ、本プログラムの為にお時間を割いて頂いた各分野を代表する専門家の方々とお会いさせていただき、私は「獅子窟中に異獣なし」という言葉がとてもしつこい貴重な場であったと感じました。各分野の最前線でご活躍されている方々の独自の体験や経験に基づいたお話を聞かせていただくことで、私自身が多くのことを学び、さらには将来への展望がより具体化され、目指すべき道が少し明確になったと感じております。この様な有意義な機会を頂きまして、本当に有り難う御座いました。また、今回のプログラムで様々なバックグラウンドを持った参加者の方々と出会えたことも大変嬉しく、プログラムは終了しましたが、この縁はこの先も大切にしていきたいと思っております。また次回皆様にあう日まで、今回のプログラムで学んだ事を生かしながら、日々邁進していきたいと思っておりますので、これからどうぞ宜しくお願い致します！

中川 弘子
名古屋大学大学院 医学系研究科・予防医学 博士1年

本当に学ぶことが多かった熱い10日間でした。

まず、一緒に参加している方の「前向きな姿勢」「知識」「情熱」に感銘を受けました。全国からとてもレベルの高く意欲的な方が集まっており、「ポリオ撲滅」というテーマを通じ、彼らと一緒に過ごし活発な議論を交わした10日間は忘れられないものです。また、講師陣の方々からの多方面からの学びは、大変貴重なものでした。私は医学部出身なので、今までに学ぶ機会がなかったマーケティング、ソーシャルネットワークの活用、問題解決手法はとても新鮮でした。このセミナーを通して学んだことは、問題解決に向けてどうアクションを起こすか、そのヒントをくれたように思います。ポリオ撲滅に関わらず、世の中に大きな問題から身近で起こる問題・たくさん問題があり解決を絶えず迫られています。それにどうアプローチをしてアクションを起こして効果的に解決をしてゆくか。ここで学んだ問題解決の手法や姿勢は他分野でも十分に応用ができると感じました。また、私たち一人の力には限界がありますが、様々な分野の方とチームとなり協力することで一人では難しかった大きな目標を達成できるのではないかと実感しました。本当に10日間ありがとうございました。

中村 有紀子
東京女子医科大学看護専門学校 看護 1年

“原点となる10日間”

黒川先生が仰った「Global citizenの意識を共有しより良いチームを作っていく。これから求められるチーム像は甲子園に見られる一人の目立つリーダーがいるという形ではなく、それぞれが役割をもつサッカー的なチーム観であること。」そのことを痛感する10日間でした。世界の最前線で活躍する一流の講師陣。様々なバックグラウンドをもつHigh levelな学生たち。私自身、着いていくことがやっとなで、グループのメンバーには沢山の迷惑をかけましたが、そこから自分の弱さと多くの課題が浮き彫りになりました。大学の恩師が「理想と現実のギャップが大きいとき、足元を固めるのではなく、理想に近づくん」と言っていた意味が分かりました。このプログラムに参加していなかったら、大きな意識の変化はなかったと思います。そして私は看護師となり、その上で、国際保健に携わることについて深く考え、それに対し何らかの示唆を得るためにも学生の内にもっと世界へ行ってみようと思いを押し付けていただきました。最後になりましたが、このような機会を頂き心より感謝しています。今回お世話になったスタッフの方々、講師の方々、学生の皆さん、本当にありがとうございました。

平野 慧
慶應義塾大学 法学部政治学科麻生良文研究会(公共経済学) 4年

10日間という短い間であったが、非常に多くの面で強い刺激を受けた。ポリオという正直に言ってほとんど知らないテーマについて、学び、調べ、議論することで得られたものは大きい。初めは細かいテーマだと思い、侮ってしまった節があったが、調べれば調べるほど奥が深く、その解決には文化や宗教といった問題も絡むということを知った時は衝撃的であった。このように、一つのテーマについて深く考えることで、逆に様々な分野とのつながりを感じることができたことは、私自身にゼネラリストであることの必要性や困難さを認識させてくれた点で、非常に意義深かったと感じている。

次に、非常に様々なバックグラウンドを持った講師の方々に出会えたことで、ひとつ気づいた点がある。それは、世の中で活躍している人、というか自分の人生を楽しんでいる人は、どの人も共通して穏やかでとても人当たりがいいという点である。このことから、実力だけでなく、人格を鍛える必要性をとても強く感じた。たとえどれほど実力があっても、人格が伴わなければ意味がないのだろう。このように、10日間を通して、自分が今後やるべきことを知ることができた点に、私はとても意義を感じている。このプログラムの中で関わったすべての人に、感謝の気持ちを持っている。

堀内 沙央里

神戸大学 保健学研究科国際保健学領域感染症対策分野 1年

今回のプログラムを通して私は多くのことを学んだ。1つの疾患をこの世界から撲滅することがどれほど難しいかということ、様々な視点を持った人が集まるととてつもなく大きいアイデアが生まれること、考えるより行動することで解決することのできる問題が存在すること、新しい問題解決方法と相手に何かを伝えるということの難しさ、そして、自分が今までいかに狭い視点でしか物事を考えていなかったかということ。私は大学・大学院を通して医療系で、今まで、医療の視点を通してしかグローバルヘルスのことを考えて来なかった。しかし、今回の学びを通してグローバルヘルスを支えている分野は医療だけではないということが分かったと共に、新しい視点を持つことができた。

ポリオに関しては、世界でポリオが撲滅されたとしても、日本のポリオ患者が今そうであるように、次にポストポリオの問題で苦しむ人が出てくる、さらに、生ワクチン由来のポリオ発生が問題になることを念頭においておかなければならないということも分かった。これは、日本のポリオ患者にインタビューして分かったことで、実際の当事者に話を聞くということも大切であることが分かった。

10日間、短い間でしたがありがとうございました。

元橋 一輝

東京大学 法学部公法コース城山ゼミ 4年

10日間のGHSPを終えて振り返ってみると、様々なことが思い出されます。一言では言い表せないほど、凝縮したプログラムでした。素晴らしい講師陣のレクチャーから始まり、各グループで睡眠不足になりながらもアクションプランを立て、フィールドワークに出ました。短期間でしたが、これほど集中して取り組んだプログラムは久しぶりでした。

GHSPを通して何を学んだかと問われると、はっきりとは答えは出ない気もしますが、以前立てたMy Goalに照らして考えてみます。一つ目は、グローバルヘルスの理解を深めることについてです。今までマラリアなどの感染症については知っていたものの、実はポリオをほとんど知らなかったため、今回のプログラムを通じて、ポリオの重要性を理解し自分の視野を広げたのは良かったと思います。二つ目は、スキルアップについてです。レクチャーでスキルについて学んだ後、実際にアクションプラン策定やフィールドワークを集中的にしたことで、スキルが身に付いたように感じました。

最後に、こうした素晴らしいプログラムに参加できたのも、大勢の方々の協力があったることだと思います。深く感謝するとともに、期待に応えるためここで学んだことを活かし将来活躍していきたいと思っています。

安田 翔

東京大学 教養学部文科Ⅱ類 2年

10日間で世界のポリオを撲滅するためのアクションプランを作る—最初にこの課題を聞いたとき、とても困難な課題にぶつかった気がした。日本から遠く離れた地の病気を何の力も持たない私たちがどう解決できるのか、非常に頭を悩ませた10日間であった。しかし問題に取り組んでみると、様々な突破口が見えてくる。班員から自分では考えつかないような視点、アイデアが出てくる。他の班と情報共有すれば、また違ったアプローチを思いつく。グループワークは僕の思考を常に刺激した。深く考え続け、チャレンジを繰り返す、そんな密度の濃いグループワークだった。最終的にはグループで一つの案がまとまった。満足のいくレベルまで落とし込むことは出来なかった。足りないデータもあったし、もっと明快なシステムの構築が必要であった。しかし、10日間である程度の具体性を持ったアクションプランを作成できたことは、班員全員の自信になったし、「チャレンジする」ことの重要性を再確認できた貴重な機会となった。正直、自分の興味の中心はヘルス分野にはない。しかし、世界を良くしたいということ、人を救いたいということを常に意識して今後も積極的に活動していけたらと思う。最後に、この素晴らしい機会の提供に携わった全ての方に感謝を述べて私の感想を終えたい。

山崎 博子
聖路加看護大学 看護学科 4年

このプログラムでは多くのものを得ることが出来ました。中でもっとも重要なものが「人との出会い」です。

<講師の方々>

講義の内容以上に、講師の方達の生き方が本当に素敵でした。自分がどのように年を重ねてゆきたいかを考えるととても良い機会でした。

<メンターの方々>

とても魅力的な方々でした。仕事以外にも活躍の場を持っていらっしゃる方も多く、生き生きとされていました。年齢が自分に近い分、「5~10年後にあんな風に生きていたいな」と思うことが多かったです。自分のキャリアパスを描く上でとても勉強になりました。

<日本医療政策機構の方々>

参加者20人の学びが最大化されるように、素晴らしい環境とプログラムを準備し提供してくれました。感謝してもきれません。

<参加者>

一口の学生と言っても様々なバックグラウンドの方がいらっしゃいました。同じ世代の人々が生き生きとキャリアを積み上げているのを見て、とても刺激を受けました。彼らの一人としてこのプログラムに参加できたことを誇りに思います。

プログラムでの出会いは私の人生にとても良いインパクトを与えてくれました。10日間本当にありがとうございました！！

吉村 やよい
大阪市立大学 医学部看護学科 3年

この10日間は、一言でいうと知的刺激に満ちた10日間であった。各分野の第一線で活躍される先生方からのレクチャーは自分の思考に様々な側面から新たな気づきを与えて下さった。レクチャーはまったく初めて知る具体的なスキルから、世界の潮流、ご自身のこれまでの経験を踏まえたお話に至るまで様々な内容であったが、それらのレクチャーを受けるうちに、これまで自分の中でぼんやりとしていた考えが明確になったり、自分が新しい切り口をもって物事を捉える方法を得たことにダイレクトに気づくことができたりして、非常に大きな充実感を得ることができた。

また、このプログラムに集まった参加者からも大変大きな刺激を得ることが出来た。高い志をもって人生を歩んでいこうとする仲間と出会い、一定期間同じ物事に向かい合い、議論を交わし、互いに刺激を与え合えたことは何物にも変え難い経験になったと感じている。これからもこの出会いを維持・活用し、互いに高め合える存在でありたいと願う。

このような貴重な学びの場を提供して下さい、私たち参加者を支えて下さったすべての方々へ心から感謝申し上げたい。多くの方に支えて頂いたことを忘れずに、プログラムから得た学びを十二分に活かし、社会へ還元できるように今後も研鑽を積みみたい。

©特定非営利活動法人 日本医療政策機構



HGPI
Health and Global Policy Institute

〒100-0014 東京都千代田区永田町1-11-28 7階

TEL 03-5511-8521 FAX 03-5511-8523

URL: www.hgpi.org

E-mail: info@hgpi.org



THE UNIVERSITY OF TOKYO